

『恋の王朝絵巻～天女の羽衣～』

著:加納 邑

ill:こうじま奈月

「わあ……」

明良は、午後の光にキラキラと水面を輝かせている広大な湖を見渡してみる。

向こう岸は遠く、山の連なるこちら側とは違って広い平野になっていた。反対側まで湖沿いに歩いて辿り着くには、半日くらいかかりそうだ。

鷹将が追いついてきて隣に立った。

「ここが、天女が水浴びをしていたという湖だ」

「きれいな湖だね、大きい！ 周りの眺望も開けていてきれいだし、岸辺が木々に囲まれていて……いかにも天女が舞い降りてきそうなところで、素敵だね！」

うっとり話す明良の足元では、風に吹かれてわずかに波打つ湖の水が、岸辺に漣(さざなみ)をたてていた。

仲間たちと後からやって来た神楽が、明良を呆れた目で見下ろす。

「お前、まさか『天女』なんてものがこの世に本当にいると思っているのか？ 以前、八岐大蛇のことも真剣に信じているようだったが、今度もまた……」

「うん。なかなか人間に姿を見せることはないだろうけど、きっといるよ」

「バカらしい」

神楽は整った茶色の眉を寄せた。

「この辺りに飛来する白鳥を、天女にたとえただけの話だろう？ 天女が実在するわけがない」

「白鳥と……あとは、まあ、ここが絹織物の産地であることも関係しているんだろう」

鷹将が口を挟んできて、明良は瞬きをして彼を見上げる。

「絹織物？」

「この地方は、昔から質のいい絹織物の産地として有名だ。その織物が、天女の美しい羽衣を彷彿(ほう)ふつさせたのかもしれない。そういったことも関係して、この地方では特に、天女の羽衣伝説がずっと昔から語り継がれてきたんだろう」

「なるほどね……」

明良は鷹将の話に感心し、深く頷いた。

「白鳥とか、織物とかが関係しているんだね。伝説って、その土地の風土に関係したいろんなものが理由になって、後世に残っていくものなんだね」

神楽の言葉には素直に頷けないが、鷹将の言うことなら笑顔で聞ける。

「少しここで休憩にするか」

鷹将が皆を振り返って言うと、仲間たちがさっそく肩から荷物を降ろした。明良も荷物を足元に降ろすとすぐ、その場に座り始めた皆の方へ向き直る。

「皆、ここから動かない？ だったら、僕、ちょっとあっちの方を見てきてもいい？」

湖の岸辺を見て回りたくてウズウズして言うと、鷹将にクスッと笑われた。

「あまり遠くへ行くなよ？ 迷子になるぞ」

「分かっているよ、もう。子供扱いしないで」

「まだまだ子供じゃないか」

「違うよ」

口を尖(とが)らせた明良のことを、座り込んでいる権現たちがボソボソと噂し始めた。

「夜の褥(しとね)でのことを聞いていると、確かに、とても子供とは思えないが」

「そうだな」

「まあ、いいじゃないか。俺たちは口を出さないでおこう。鷹将様があいつをまだ子供だと言って、猫可愛がりしたいと思っていらっしゃるのだから」

顔を見合わせ、鷹将の趣味が理解できない、と言いたげに苦笑しながら肩をすくめる。

明良は、聞こえているよ！　と言ってやりたかった。

「僕、一人でこの辺を見て回っているから。鷹将はついて来ないでよっ？」

明良はクルリと踵を返し、その場をあとにする。

湖に沿って続いている雑木林の中を歩いていくと、しばらくして少し開けた岸辺に出た。

大人の男二十人ほどが輪になって座れそうなほど広いその場所は、雑木が切り払われて広場のようになっている。

二、三間離れている岸辺に一人の娘が立っているのに気づき、明良は足を止めた。(なに？　女の人……？)

単衣(ひとえ)の上に、貴族女性のような袖の広い桂(うちぎ)を羽織り、紵(くけ)紐(ひも)を使って踝(くるぶし)まで裾を上げている。腰まである黒髪が美しい彼女はすらりと背が高く、ほっそりとしていた。

明良より少し年上だろうか。肌が抜けるように白く、湖を見つめる横顔は大人っぽく整っている。柳眉と大きな黒い瞳、紅を引いたような赤い唇が特に印象的で、十人男がいれば十人ともが息を呑んで見惚れるだろう、たおやかな印象の美人だった。

その華(きゃ)奢(しゃ)な肩にふわりと掛かっている布に、明良はハッとした。

(あ！　あれって、天女の羽衣……っ？)

彼女が羽織っているその布は、遠目にも上等なものだと分かる。

薄織りで、おそらく絹でできているのだろう。下の桂の薄水色を透かし、まるで大きな半透明の羽でも身につけているかのように見えた。

(すごくきれいな人で、羽衣みたいなものをまとってる。もしかして、天女……？)

湖の方を眺めていた娘が、ふと顔をこちらへ向けた。

そして明良を見つけ、目を瞠(みは)る。

「あ……？」

もともと大きな目をさらに大きくした彼女に、明良は相手が女性一人ということもあり、怖がらせないようにその場から動かずに言った。

「あ、あの……ぼ、僕は怪しい者じゃなくて。旅をしていて、ちょっと休憩中だから湖を見にただけです。そうしたら、あなたがいて……声もかけずに見ていて、すみません。でも、決して怪しい者じゃありませんから」

「旅？」

明良が自分とそう年の違わない少年だということに安心したのか、娘の顔からみるみる警戒の色が消えていく。

「あの……そっちへ行ってもいいですか？」

訊ねると許しをもらえたので、明良は静かに雑木林の中から出ていった。彼女の前に立ち、持ち前の明るい笑顔を向けると、娘におずおずと問われる。

「旅を……されているのですか？ あなたお一人で？」

「いえ、僕一人だけじゃなくて、仲間といっしょに。ここから半月ほど歩いたところにある土地から来て、さっきこの湖に着いたばかりです」

明良は、これから他の八人の仲間たちとこの国をあちこち巡ることになっていると説明した。明良の話聞いた娘が、ものめずらしそうに瞳を瞬かせる。

「まあ、この国をすべて見て回る予定なのですか……？」

「できればそうしたいな、と思っています。それで、この湖には天女の羽衣伝説が残っているっていうことだから、一度見てみたくて立ち寄って……」

明良が話している途中、背後でガサッと木の枝が揺れた。

「姫様っ？」

鋭い男の声がしたかと思うと、三人の若い男と中年の女性が一人、明良の後ろにある雑木林の中からあわてたように早足で出てくる。

近づいてきた彼らは、先ほどから話していた娘を明良から守るようにして立った。

「なんですか、この者は？」

「おい、お前！ うちの姫様に、なんの用だ？」

眉を寄せて明良に凄(すご)む男たちは、体格はよいが着ているものはそう上等ではない。どこかの屋敷の使用人でもしているような風体だった。

「いいのです、大丈夫。この方は怪しい人ではありません、旅をしている人です」

娘が明良を庇(かば)ってくれて、彼らに命じる。

「この方とお話をしたいから、お前たちは外していて」

「は、はい……。ですが、お気をつけください……」

男たちと中年の女性が明良の方を不審の目で見ながら、しゅしゅとといった様子で山際の雑木林の方へ向かうと、娘は明良に苦笑いを向けてきた。

本文 p43～48 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>